釈尊誕生伝説の変遷

——ガンダーラの仏教を中心に——

上枝いづみ

目次

序論
第一章　誕生伝説の形成
　第一節　誕生伝説の構成
　第二節　ヤクシニー（yakṣinī）女神と母マーヤー
　第三節　サンスクリット仏伝とヒンドゥー教プラーナ聖典との関連—「生苦」の概念—
　第四節　ガンダーラの誕生伝説にみられる思想
第二章　図像に見る釈尊誕生
　第一節　インド古代初期の誕生図像について
　第二節　ガンダーラの作例
　第三節　ガンダーラの作例にみられる思想
第三章　ガンダーラの誕生伝説と社会背景
結語

序論

釈尊の誕生伝説は、歴史的事実に多分の神話的要素を組み込んでいるという点において興味深い。

先行研究の主眼はこのような仏伝の神話的表現については意識的に排除し、歴史的釈尊像を構築することに置かれてきた。

だが、現存資料がいかに古くても、それらが釈尊滅後三、四百年以上を経たものであることを鑑みれば、仏伝から導き出される歴史的釈尊像は推論の域を出ない。

仏伝から読み取れるものは伝説を受け継いだ人々の釈尊観である。その変遷は単なる空想の付加ではなく、地域と時代毎の社会背景と、仏教徒の具体的信仰形態を反映し、一定の文化の流れに沿っている。この流れこそが歴史的事実であり、仏教の受容と変容が如実に示されている。

この視点から仏伝をみるとき、むしろ神話的要素の時代的背景の考察が必要となり、仏伝の記述全ては重要な史料である。

仏伝のなかでも神話的要素の最たるものが誕生伝説といえる。この場面の形成についての考察は先行研究の主流ではないが、ここにこそ、人々の釈尊への願いが表れている。また、釈尊の誕生という出来事を人々が如何に願ってきたかという問題は、仏身論や仏伝の発展過程の問題とも密接に関係し、仏教史上非常に重要である。

さて、一連の釈尊誕生伝説の形成に関して、文献上からその原初形態を問うことは困難であるが、ただ確実であるのは、仏伝図に初めて誕生図を表したのは、クシャーン朝下のガンダーラ地方であることである。

周知のように、ガンダーラの仏伝図は、インド世界とは異なり釈尊の生涯を時系列的に表現する点、それまでのインド世界において

不可視の存在であった釈尊を、人間の姿で表現した点において特記される。これは仏像の出現とともに「不可視の存在」を「人間化」したという理解もされる。だがガンダーラの誕生図では、釈尊は母の右脇腹から生まれている。これは文献研究では「神格化」表現ともされる。これは如何なる社会的要請のもと、如何なる釈尊観から表現されたのであろうか。

この問題には美術史からの考察が多い。そこで本論では、誕生伝説の変遷過程の中でも、ガンダーラ地方との関わりを考察対象とし、方法としては文献と美術作品の比較検討を行う。これより、クシャーン朝下ガンダーラの仏教信仰形態に関する一試論としたい。

第一章

ここではまず誕生伝説を記す文献群を検討し、誕生が物語られる際の基本表現を、パーリ中部経典『希有未曾有法経』に依って考察した。

本経と他文献との比較により、基本表現以外に用いられるエピソード、登場人物の変容は、時間的展開のみならず、むしろ地域的展開を表すことを論じた。

例えば、釈尊の母が「立って出産」するという基本表現はパーリ文献が記す。この背景には従来指摘されるように、釈尊の母の描写に生産・豊饒の樹女神ヤクシニーの概念が取り入れられていると思われる。ただ、他文献ではこの基本表現から付加がみられる。

分類すれば、パーリ文献が立って出産のみ、『根本説一切毘奈耶有部破僧事』、『衆許摩訶帝経』が天幕に覆われる伝説、『ラリタヴィスタラ』『マハーヴァストゥ』などの初期大乗思想がみられるとされるサンスクリット仏伝、及び漢訳仏伝、『根本説一切有部毘奈耶雑事』が「右脇生」を記す。この理由には、大別すれば其々が南方上座部、チベット、西北インドの文化的基盤の影響を受けたことが推測できる。

ここで、「右脇生」が以上の北伝文献にのみ見られることに注目した。これはどのような理由によるであろうか。また先行研究でも言及されてきた、『リグ・ヴェーダ』にみられるクシャトリヤ階級の象徴説や、古代インドにおける男子が母の右脇に宿るという概念等との関連は如何なるものであろうか。

そこで、原実氏により誕生伝説の背景として指摘される、ヒンドゥー教プラーナ文献の「生苦」の思想との関連について検討した。

これは人間が誕生時に実際に受ける肉体的苦痛と、胎内で意識を有している胎児がその苦痛によって前世の記憶を喪失するという概念である。そしてこの「生苦」に類似する表現がサンスクリット文献及び漢訳仏伝に顕著にみられることが判明した。

「右脇生」を記している『ラリタヴィスタラ』『マハーヴァストゥ』は同時にプラーナとの類似も指摘されており、ヒンドゥーイズムとの関連が想起される。

ここから、「右脇生」が説かれた背景にはプラーナも説く「生苦」

の概念が浸透している前提があり、釈尊の誕生に「生苦」が避けられたと考える。

また、これらのサンスクリット仏伝の説く釈尊観に注目した。それは「世間に仮に現れて様々な行を行い、衆生を救う」という「世間随順」の釈尊観である。先行研究では、この思想は二世紀中葉には西北インドに存在したことが指摘され、初期大乗思想に位置づけられる。ここでは、釈尊は成道後だけでなく、生涯を通して衆生救済の活動を行う存在と認識されるだろう。

世間に随順した仮の誕生に、世間とは異なる「右脇生」が必要視されることについて、以上の考察からは、釈尊の誕生伝説は当初から一切の苦を越えた最後生の人物の誕生は如何なるものかを説いていること、仏伝経典に釈尊の前世からの修行が説かれることと関連して、背景に「生苦」の概念が指摘出来る。これはガンダーラで初めて誕生図が製作された頃の西北インドの思想として注目できる。

第二章

第二章では、ガンダーラの誕生図について、まずそれ以前のインド古代初期と比較して考察した。この時代では釈尊不可視が貫かれ、空間的・叙景的表現の仏伝図が見られる。

先行研究を整理すれば、インド古代初期には誕生は象徴表現にとどまること、出家以降になると主題が増加することが指摘される。これより、インド古代初期には誕生を物語る機運がまず存在していないことが分かる。

以上をふまえ、ガンダーラの誕生図を、第一章に述べた「右脇生」を記す仏伝文献との関連を検討しつつ考察した。そしてガンダーラの誕生図の主題は、ほぼ『ラリタヴィスタラ』の記述に反映されており、製作意図も明確になることが判明した。

例えば、ガンダーラの二流灌水図の特徴とされる、インドラ・ブラフマー神の灌水表現は、『ラリタヴィスタラ』（5―44他）と関連の『普曜経』（T3.p.494ab）・『方広大荘厳経』（T3.P.547b）にのみ存在する「香水での洗浴」の場面にみることが出来る。これは灌水というよりも以上の洗浴の場面と比定できるのではないかと思われる。

また、ガンダーラの仏伝図表現の背景には歴史的釈尊の生涯への興味が指摘されるが、以上の事実から、ガンダーラの仏伝製作に関わった人々にとっては、釈尊は、第一章に述べた「仮に世間に随順して活動する」最後生の存在であったと考えられる。

管見での80例ほどのガンダーラの誕生図は出土地に関わらず全て右脇生である。ガンダーラの仏伝図の主題は一定していることが特徴ではあるが、それでも表現には異なるヴァリエーションがみられる為、この事実からは、ガンダーラでは右脇生にこだわる宗教的理由が存在したという見方が自然である。

また、ガンダーラの誕生図に現れる登場人物のなかでも、布を振り、口笛をふく讃嘆神に注目した。この讃嘆神は古代初期のバール

フト彫刻に現れるだけでなく、『スッタニパータ』の描く誕生を表す情景に登場する。そして『ラリタヴィスタラ』や『仏本行集経』はこれを誕生の場面に描いている。

これより、ガンダーラの仏伝製作に加わった人々は、西方の影響のみならず、インド古代からの伝承を理解していることが伺える。

第三章

以上の考察から、ガンダーラにおいては仏伝美術と仏伝経典は、釈尊への讃美という点で軌を一にした仏教徒の表現活動と捉えることが出来る。

そこで第三章では、仏伝製作の担い手としてダルマ・バーナカ（法師）の存在に注目した。先行研究では、これらの法師が、教理よりも釈尊の前生譚や仏伝、譬喩譚から仏教の教えを汲み取ろうとする傾向にあること、ガンダーラでは主に教団外周の人々に多く見られる存在であることが指摘される。

そして、この法師が民衆にむけて高らかに仏教の教えをうたった存在であることは、サンスクリット仏伝がプラーナと類似した表現を持つ点と並んで興味深い。ここから、これらの仏伝が民間普及の性格を持ったものであり、享受する仏教徒がすでにヒンドゥーの民間信仰に親しんでいることが前提であることが想起される。

結　論

以上述べてきたことから、以下のことが明らかとなった。

ガンダーラの誕生図の特徴である「右脇生」を記す文献に注目すれば、同時代の西北インドの精神的文化的基盤を有したものとなる。この比較検討により、誕生伝説の「右脇生」変容はガンダーラと密接な関わりを持つといえる。背景には従来指摘されるように初期大乗とヒンドゥーイズムとの関連性があり、これが西北インドに顕著であり、釈尊の誕生伝説に変遷を齎したと指摘出来る。

衆生救済の為に仮に世間に随順する、最後生としての誕生に「右脇生」が必要であるのは、「生苦」を避け、仏伝経典に説く過去世からの善行と、生涯を示現する出生を結び付けるためと仮定できる。ただ、初期大乗経典の釈尊はパーリ文献と比較すれば「右脇生」の超人的存在にみえるのであるが、これらは同じ基本構造をもち、一貫して救済者としての最後生の人物の誕生を説くことに注目したい。つまり、ガンダーラでの「右脇生」の誕生伝説は、その最後生としての誕生を説くときに仏教徒が対面した文化的基盤を物語る。この仏伝変容は、釈尊の神格化というよりもその時代精神の反映と捉えられる。

また、ガンダーラの仏伝図は『ラリタヴィスタラ』にみられるような初期大乗思想と関連していると考えられ、この世間随順の思想とガンダーラの仏伝製作運動は、大乗の活動の発展、また釈尊観の

発達についても重要であることが認識される。これに関わった人物、また文化的基盤についての考察を進めるべきであるが、それは今後の課題としたい。

呉と南唐政権の集団構成について

久保有道

目次

はじめに
第一章　呉太祖楊行密期における集団構成について
第一節　初期楊行密の集団形成
第二節　揚州戦争に見られる軍事的集団の参入
第三節　楊行密集団における「黒雲都」創設の目的
第四節　呉における権力集中化への流れ
第二章　呉から南唐への勢力変遷過程について
第一節　徐温の政治的な台頭
第二節　徐温による政治的権力の確立
第三節　徐氏体制への変遷
第三章　南唐烈祖徐知誥（李昪）期における集団構成について
第一節　徐温による文臣官僚の積極的登用
第二節　南唐政権における「客」
第三節　南唐政権集団の成立背景
おわりに

はじめに

唐末の混乱期以後、南方に割拠した呉と南唐の二代政権は、五代